

# ヨエル預言書

ヨエルは本書第一章第一節からわかる通り、ファトウエルの息子で、前の預言者オゼーと同時代の人であつたが、後者が専ら北のイスラエル王国で預言者の使命を果たしたのに対し、彼は南のユダ王国を舞台に活躍した。彼がモイゼの儀礼の重要性を強調していることから推して、彼は司祭であつたと断ずる人もあるし、彼が度々司祭に話しかけながら、王については一向述べていないことから、ヨアス王治世の初期（西紀前八〇九年頃）には大司祭ヨヤダが未成年の王に代つて政事を扱つていたので、彼はその時代に活動していたのだと結論する人もある。

## 第一章

蝗の害の喩による荒廢の預言

一 ファトウエルの子ヨエルに下りし主の御言。二 老いたる人々よ、<sup>1)</sup> 汝等是を聴け、地のすべての住民よ、汝等耳に留めよ。汝等の時代、<sup>3)</sup> 或は汝等の父祖の時代に、曾てかかる事の起こりし例ありや。三 汝等は汝等の子等に、汝等の子等はまたその子等に、その子等は更に次の代に、この事を語り伝えよかし。<sup>2)</sup> 四 青虫の遺

第一章 1) 老人は多くの経験を積んでいて一番昔のことに明かるいから、まず第一に勧告される。— 2) 御民がエジプトから救い出され

五 せるものは、蝗之を喰い、蝗の遺せるものは、甲虫之を喰い、甲虫の遺せるものは、黒穂病之を滅ぼしたり。<sup>3)</sup> 五 酔える者よ、汝等目ざめて泣け、凡て楽しみて葡萄酒を飲む者よ、汝等号び哭け、そは汝等の口に入るに絶えなければなり。<sup>六</sup> 是は或国民のわが国に攻め上りたるが故なり、そは強くして数知れず、その齒は獅子の齒の如く、その牙は若獅子の如し。<sup>七</sup> 七 そはわが葡萄酒を荒らし、わが無花果の樹の皮を剥ぎて裸かにし、之を棄てたり。その枝は白くなれり。<sup>八</sup> 八 己が若かりし時の夫の為に喪服を纏う乙女の如く嘆き悲しめ。<sup>九</sup> 九 素祭も灌祭も主の家に絶え、主の下僕なる司祭等哀しみ悼めり。<sup>10)</sup> 一〇 田園は荒れ、地は嘆けり、そは穀物荒らされ、葡萄酒尽き、油乏しくなりたればなり。<sup>5)</sup> 二 小麦と大麦との為に、耕作者は恥じ、葡萄栽培者は泣き号べり、畑の収穫滅びたればなり。<sup>11)</sup> 一二 葡萄酒畑は荒れ、無花果樹は衰え、石榴、棕櫚、林檎、及び野のあらゆる樹は萎れたり、実に人の子等の悦楽は失

たことも同様子孫に語り伝えなければならなかつた。  
 出一〇・二参照。  
 3) ヨエルは蝗の害の喩をかりて、恐るしい敵による將來の国土の荒廢を述べているのらしい。出一〇・一二―二〇参照。  
 4) 十分の一税も贈り物も、もうもらえないから。  
 5) パレスチナの主要産物三つ。

一三 せぬ。一三 司祭たちよ、汝等帯して嘆き悲しめ、祭壇の下僕たちよ、汝等泣き号べ、わが天主の下僕たちよ、汝等入りて喪服を纏いて臥せ、  
 一四 そは素祭も灌祭も汝等の天主の家に絶えなければなり。一四 汝等聖なる断食を行い、会を召集し、長老等、国の住民を悉く汝等の天主の家に集め、主に向かいて叫べ、<sup>6)</sup> 一五 ああ、ああ、その日！<sup>7)</sup>と。  
 一六 実に、主の日<sup>8)</sup>は近きにあり、そは全能なる者より荒廃の如く来らん。一六 食物は汝等の目の前より、愉楽と歡喜とは我等の天主の家<sup>9)</sup>より、失せたるにあらずや。一七 家畜はその糞の中にて腐り、納屋は壊れ、倉は荒れたり、そは穀物滅びたればなり。一八 畜の呻きしは何が故ぞ、牛の群の啼きしは何が故ぞ。彼等に牧場なきが故なり。その上羊の群も死に絶えたり。一九 主よ、我汝に向かいて叫び奉らん、そは火<sup>10)</sup>眺め佳き草原を焼き尽し、焰田園のあらゆる樹木を焼きたればなり。二〇 剩え野の獣らもまた、雨を渴望する平野の如く、汝を仰ぎ見ん、そは水

6) あまねく領内が困つてゐる時にはこういう一般の償いおよび祈願の日が定められた。士二〇・二六参照。  
 7) 「その日は禍なるかな！」の意。  
 8) 預言者たちがよく主の日といふのは、天主が審判を行ひ給う日、殊に世の終りのそれ。  
 9) イスラエル全土  
 10) 旱魃。

の源涸れ、火眺め佳き草原を焼き尽したればなり。

第二章

天主の審判とイスラエルの回心、聖靈降臨、世の終りに関する予言

一 汝等シオンにて喇叭を吹き鳴らせ、わが聖なる山にて叫びをあげよ、国の住

民みな震慄くべし。そは主の日に来ればなり、実にそは近きにあり。 是は

暗黒晦冥の日、密雲旋風の日なり。数多く力強き民、宛ら晨光の山々の上に

拡がる如くならん。之にたぐう者は開闢の始より以来曾てありしことなく、之

が後にも代々幾年にわたりて、またあることなかるべし。 三その面前には焼き

尽す火あり、その後には燃え上る焰あり。地、その過ぐる前は楽園の如くなれ

ど、その過ぎし後は荒れて人なき野の如し。しかも之を免れ得る者、絶えてあ

らざるべし。 四彼等の状は、馬の状の如し、彼等は騎兵の如く馳せまわらん。

五彼等山々の頂に跳び躍らんか、宛ら戦車の轟く如く、切株を焼き尽す火焰の

音立つる如く、戦闘の備え成れる強き民に似たり。 六その向かうところ、民太

第二章

1) 本一

・一五

同様審

判の日

2) 本一

・六以

下参照

七 苦しき、その面すべて釜<sup>3)</sup>の如くなるべし。彼等は勇士の如く馳せ向かい、軍人の如く石垣を乗り越えん、彼等己が道を進みて、その進路を離れじ。八 彼等いづれもその兄弟を押し除くることなく、各々その径を歩まん、<sup>4)</sup> 剩え彼等窓より雪崩れ入るとも害を受けざるべし。九 彼等は邑に入り、石垣の上を走り、家々に攀じ登り、盗人の如く窓より踏み入らん。一〇 その向かうところ、地震い、天揺ぎ、日も月も冥み、星辰またその光輝を失えり。<sup>5)</sup> 二時に主その軍勢の面前にて御声を発し給えり、是、その陣營極めて人多く、彼等は強くして御言を行えばなり、実に主の日は大にして、甚だ畏るべし、誰か之に堪うることを得ん。<sup>6)</sup> 二三 されば今、<sup>7)</sup> 主云い給う、汝等断食し、泣き悲しみ、太く嘆きて、心の底より我に立ち帰れ。<sup>8)</sup> 一三 汝等の衣服にあらずして、汝等の心を裂き、かくて主汝等の天主に立ち帰れ、そは彼恵あり情あり、能く勘忍し、憐憫に富み、ややもすれば、災厄を止めんとし給う

3) 火にかけられた釜。 — 4) 蝗にたとえてある。 — 5) 賽

一三・一〇。本三

・一五。結三二・

七。マテオ二四・

二九。 — 6) 耶三〇

・七。歴五・一八。

番一・一五。

7) 審判の日はすでに近いが、天主は

まだ悔悛を受け容

れ給う思召し。

8) 本節から一九節

まで灰の水曜日の

書簡。

一四 によりてなり。9) 一四 誰か知る、彼の翻りて赦し、その後祝福を、主汝等の天  
 一五 主に對する素祭と灌祭10) とを献ぐる遑を与えんとし給うことなしと。一五 汝等シ  
 一六 オンにて喇叭を吹き鳴らし、聖なる断食を守り、会を召集し、11) 一六 民を集め  
 一七 てその会衆を聖くし、老いたる人々を寄り合わしめ、幼児等と乳呑児等とを集  
 め、新郎をしてその臥床を、新婦をしてその紅閨を出でしめよ。一七 主の下僕な  
 る司祭等は、廊と祭壇との間に、泣きて云わん、赦し給え、主よ、汝の民を  
 一八 赦し給え、汝の嗣業を異邦人の支配する所となして、之を耻辱に委ね給うなか  
 一九 れ。何ぞ異邦人の間に「彼等の天主は何処にかある」と云う者をあらしむべけ  
 二〇 んや。一八 主は己が地の為奮発し、その民を容赦し給えり。一九 主答えてその民  
 二〇 に曰えらく、視よ、我穀物と葡萄酒と油とを汝等に贈らん、汝等之に飽くべし。  
 我最早汝等を異邦人等の間にて誹らるるものとなさじ。二〇 我北より来る者を汝  
 等より遠ざけ、之を道なき荒地に逐いやらん、その先鋒を東の海に、その殿軍  
 を最極の海に逐い落さん、その惡臭立ちのぼり、その臭き香漂うべし、是高

9) 詩八

五・五。

拿四・

二。

10) 汝ら

が献げ

物とし

て用い

得る畑

の産物

11) 本一

一四。

二 ぶりて事をなしたればなり。12) 三 地よ、怯るるなかれ、喜び樂しめ、そは  
 三 主大事をなし給いたればなり。三三 野の獸らよ、汝等怯るるなかれ、そは荒  
 地の眺めよき所青み、樹は果を結び、無花果樹や葡萄樹は力づきたればな  
 三三 三三 またシオンの子等よ、汝等も主汝等の天主によりて喜び樂しめ、そ  
 は彼正義を教うる者13) を汝等に賜いたる上に、また旧の如く早き雨と晚き  
 二四 雨とを汝等に降らし給うべければなり。二四 かくて打禾場には穀物満ち、酒  
 二五 搾場には葡萄酒と油と溢れん。二五 我、蝗、甲虫、黒穂病、青虫など、わが  
 二六 汝等に遣りし14) 大軍の食い荒したる年に対して、汝等に返す所あらん。  
 二七 汝等は食いに食いて飽き、汝等に奇蹟をなし給える主汝等の天主の御名  
 を讚め称うべし。わが民は恒久に滅ぶることあらじ。二七 是において汝等我  
 二八 がイスラエルの只中におるを知らん。我は主汝等の天主なり。他にまたあ  
 ることなし。わが民は永遠に滅ぶることあらざるべし。二八 この後に15) 我す  
 べての肉にわが靈を注ぐことあらん。汝等の息子娘たちは預言し、汝等の

12) 蝗の喩の続  
 き。—東の海  
 とは死海。い  
 やはての海と  
 は地中海のこ  
 と。—13) 一説  
 ではベピロン  
 から帰国した  
 時代の予言者  
 たら。また一  
 説ではメシア  
 14) 罰するため  
 に。—15) メシ  
 アの時代。

二九 老いたる人々は夢を見、汝等の若者等は幻示を見るべし。16)  
 三〇 注がらん。17) 我なお天地に奇瑞を顕さん、血と火と煙の渦  
 三二 と18) 即ちこれなり。三二日は闇に、月は血に変らん、こは主  
 三三 の大なる恐るべき日の来るに先立つなり。19) 三三その時かく  
 なるべし、主の御名を呼びまつる者は、何人も救われん、  
 そは主の曰える如く、シオンの山とイエルサレムと、主の  
 召し給わん残余の人々とに、救拯ある20) べければなり。21)

### 第三章

ヨサファトの谷における審判

一 実にも視よ、我ユダとイエルサレムとの俘虜等を帰さん  
 二 その日その時、三万国の民を集め、之をヨサファトの谷1)  
 に引きゆき、其処にてわが民わが家督イスラエルの為に彼

16) 賽四四・三。—17) 聖霊降臨によつて成就。徒二・一六以下参照。—18) ヨエルは聖霊降臨に続いて世の終りの審判を述べる。  
 19) 本二・一〇。マテオ二四・二九。—20) メシアの教会において。  
 21) 羅一〇・一三。

第三章 1) 「ヨサファトの谷」という名は単に「主裁き給う」という象徴的意味を持つている



九	八	七	六	五	四	三
<p>聖なる戦争を起し、勇士等を募り、すべての軍人をして近寄らしめ、上り来</p>	<p>り渡すべし、それ主然告げたるぞ。九汝等国々の民の間にかく呼わり伝えよ、</p>	<p>より遠く離れしめんとしたり。七視よ、我汝等が彼等を売り渡したるその処</p>	<p>が惜しむべき美わしき物の数々を汝等の神殿に持ち行き、六ユダの子等とい</p>	<p>ち速かにその報を汝等の頭に返すべし。五それ、汝等はわが金銀を取り、わ</p>	<p>まん為に、少年等を娼家に置き、少女等を売れり。四さりながら、チロ、シ</p>	<p>ればなり。三彼等はわが民を取らんとて、籤を抽き、葡萄酒を得かつ之を飲</p>

だけで、我らにはわからな  
いが、ど  
こか世の  
終りの審  
判の場所  
をさす。  
2)この非  
難は殊に  
フエニキ  
ア人に対  
して言わ  
れる。

一〇 らしめよ。一 汝等の鋤を剣に、汝等の鶴嘴を槍に、打ち直せ。弱き者も云  
 二 えかし、我は強し、と。二 周囲のすべての国民よ、汝等急ぎ、来り集れ。  
 三 主彼処にて汝の勇士等を仆れしめ給わん。三 国々の民は起ちてヨサファト  
 の谷に上り来れ、そは我彼処に坐して、周囲の国々の民を悉く裁かんとす  
 一三 ればなり。一三 汝等鎌を入れよ、そは刈入るべき物熟したればなり。去来、  
 くだ 下り行け、そは酒搾場は満ち、桶は溢れたればなり、実に彼等の悪は夥し  
 一四 くなれり、と。一四 判決の谷に民また民あり、それ、主の日は判決の谷に近  
 一六五 づきたり。3) 一五 日も月も冥み、星辰またその光輝を失えり。4) 一六 主シオン  
 より轟に叫び、5) イエルサレムより御声を発し給わん、天地ために震動く  
 一七 べし。されど主は御民の希望、イスラエルの子等の力となり給わん。一七 是  
 において汝等、我汝等の天主たる主が、わが聖なる山シオンに住めること  
 を知るべし。イエルサレムは聖なる所となりて、最早他国の者のここを通  
 一八 ることあらし。一八 その日にはかくなるべし、山々甘露を滴らせ、丘々に乳

3) ヨサファトの谷がここで「判決の谷」と称ばれているのは、世の終りにそこが判決の下される場所となるから。一4) 本二・一〇。  
 5) 獅子のよう  
 に。歴一・二  
 参照。

一九 流れ、<sup>6)</sup> ユダのすべての河川に水流れ、主の家より泉湧き出でて、  
茨の溪谷<sup>7)</sup>を潤すに至らん。<sup>8)</sup> 一九 エジプトは寂びれ、エドムは死滅

二〇 その地に流したればなり。三〇されどユデアには永久に、イエルサレ

ムには千代に八千代に、人住むべし。三二 我未だ潔めざりし彼等の血

を潔めん。かくて主シオンに住まり給うべし。

6) いつもはみのりの  
少ない所が豊かな收  
穫をもたらすだるう

ことに葡萄園や牧場  
が。一)へブレオ語

本「シツテム」即ち

「アカジア」の谷。

8) 歴九・一三。